

笠原南遺跡発掘調査現地説明会資料

令和7年(2025年)10月5日(日) 公益財団法人滋賀県文化財保護協会



笠原南遺跡と調査の概要

■遺跡の概要と既往の調査

笠原南遺跡は、野洲川下流左岸の滋賀県守山市笠原町に所在し、弥生時代から平安時代にかけての集落跡および生産遺跡(水田耕作地帯)として知られています。

本遺跡は、昭和59年度(1984年度)に県道48号(主要地方道路近江八幡守山線)敷設に先立ち試掘調査が実施され、埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が確認されました。その後、昭和61年度(1986年度)にかけて発掘調査が実施されました。調査の結果、調査地南側の県道11号(主要地方道路守山栗東線ーレインボーライン)に近い地点で奈良時代から平安時代にかけての溝に区画された屋敷跡が、北側の笠原の集落に近い地点からは弥生時代末から古墳時代初頭の集落がみつかりました。特に奈良時代から平安時代の屋敷内の溝や建物を構成する柱穴から銅製銚帯(ベルトの飾金具)や転用硯(硯に転用した土器)、墨書土器(墨で字が書かれた土器)が出土しています。

■今回の調査成果の概要

公益財団法人滋賀県文化財保護協会が守山市土地開発公社からの依頼により、産業用地開発に伴う発掘調査を令和6年度(2024年度)から実施しています。

今回の調査では、おもな遺構として弥生時代末から古墳時代初め(約1,800年～1,700年前)の周溝墓、溝、川、井戸、掘立柱建物や古墳時代後期(約1,500年～1,400年前)から平安時代(約900年前)に流れていた川等がみつかりました。そして、これらの遺構に伴って、弥生土器や土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器といった、多様な土器が出土しています。また、弥生時代末から古墳時代初めの掘立柱建物の柱穴



図1 笠原南遺跡(黒枠)と今回の調査地点(赤塗部分)

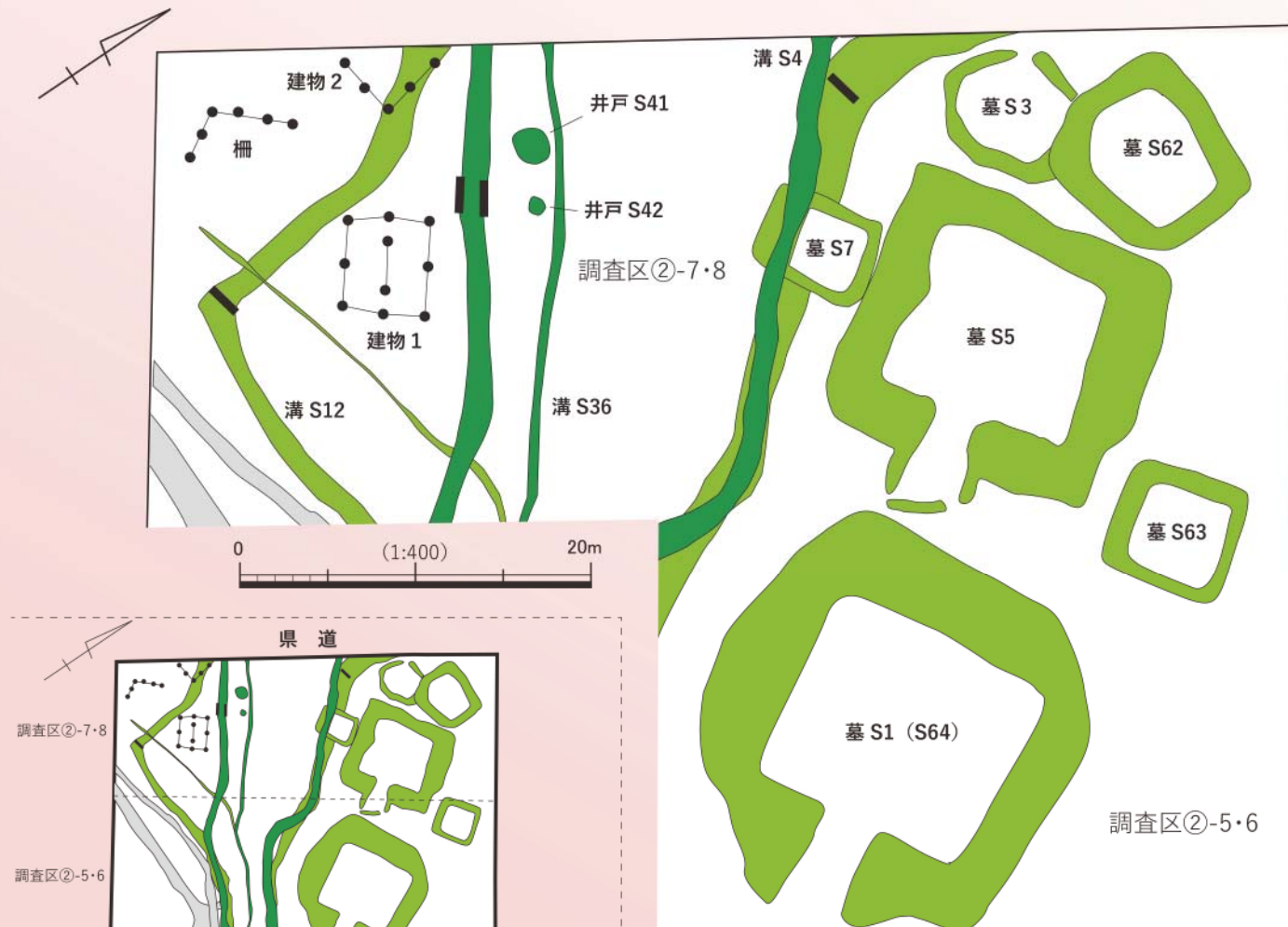


図3 調査区②-5～8 遺構図

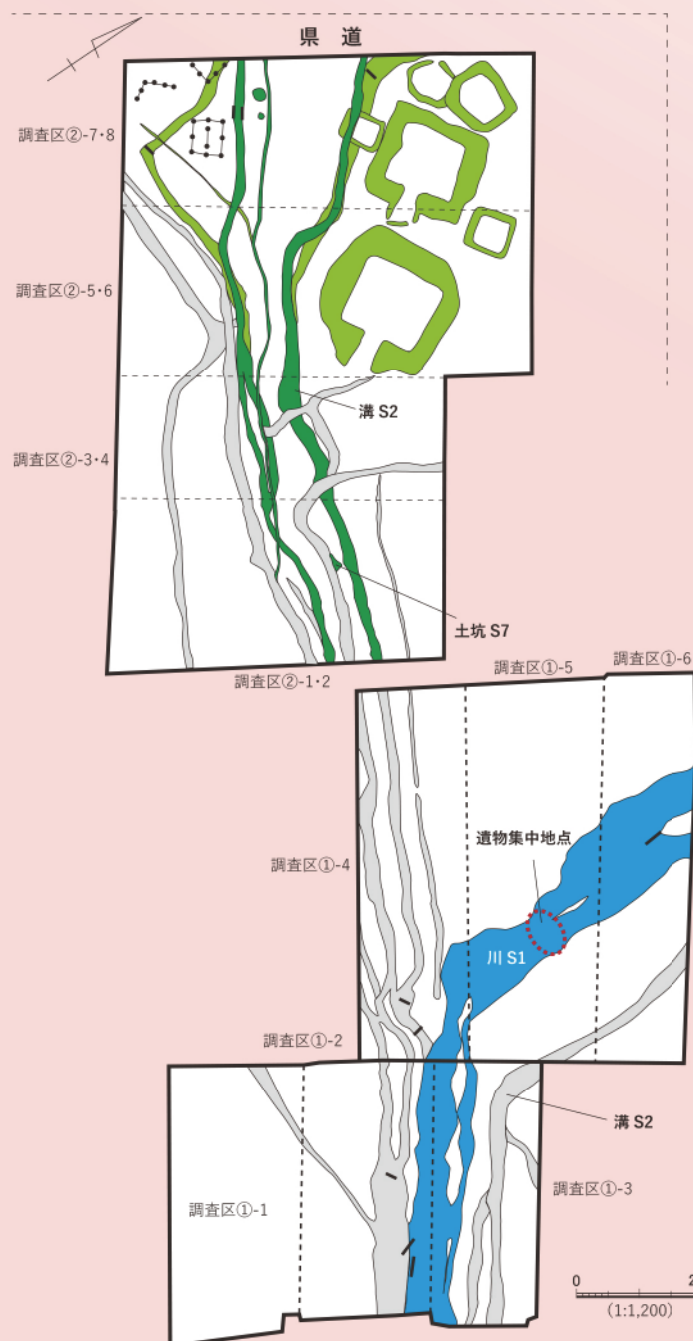


図2 調査地全体図



からは銅鏃が、古墳時代後期から平安時代の溝や川からは、墨書土器や人形代・舟形代(木製の人や舟を象った祭祀具)などがみついています。

おもな遺構と遺物

■周溝墓 調査区②-5・7・8の東側から、6基の周溝墓がみつかりました。その中には前方後方形の周溝墓2基(墓S5:全長約19m、墓S1:21.5m)を含みます(写真①)。

墓S5は、全長19mを測り、周溝は前方部の東西側で幅0.5m、深さ0.2m程度と後方部側と比較すると非常に浅くなる特徴があります。そして、南側は周溝が周っていませんが、幅0.7m、深さ0.4m程度の溝



写真①周溝墓群

が掘られています。また、後方部北側の周溝とくびれ部北側から、墳丘上で執り行われた祭祀に使われたと考えられる土器がまとまってみつかっています(写真②)。それらの土器から弥生時代末頃に造られたことがわかりました。

墓S1は、全長21.5mを測ります。墓S5の南東側でみつかっています。周溝は前方部の東西、後方部に周っていますが、前方部の南側では確認されませんでした。土器類は、周溝の埋土中から弥生時代末頃の土器が少量出土しています。西側に位置する墓S5の前方部端に掘られた溝と周溝の重複は認められませんでした。主体部への通路にあたる前方部を塞ぐ位置に造られていることから、墓S5より後に造られたと考えられます。

他の周溝墓は、土器が出土していないので正確な時期はわかりませんが、墓S5を中心に密集している状況から同時期に造られた可能性が高いと考えられます。

前方後円形周溝墓は、県内では湖南地域を中心にみつかり、弥生時代後期から古墳時代初めの時期に造られていることが分かっています。

■掘立柱建物と井戸

調査区②-7・8の南側からは、掘立柱建物1(2間×2間・棟持柱付)の建物がみつかりました。屋内に棟を支える柱を持つ特殊な建物と考えられます。その建物の南西隅の柱穴から銅鏃が出土しました。また、北側で井戸が2基がみつかり、出土した土器から古墳時代初めの時期と考えられます。

遺物は、調査対象地の南東側の溝(灌漑用水路)からはほとんど出土しない一方、掘立柱建物を中心とした区域で集中的に出土しています。その状況は対称的で、空間の用途を考えると非常に示唆的であるといえます。



写真②墓S5後方部北側遺物出土状況



写真③掘立柱建物1



写真④



写真⑤



写真⑥

写真④掘立柱建物1の柱痕から出土した銅鏃 / 写真⑤掘立柱建物1の遺存していた棟持柱 / 写真⑥井戸S42の遺物出土状況



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧

【墨書土器】

写真①～③:「田」 写真④:「田屋」

写真⑤:「夜」 写真⑥:「太」

【人形代/舟形代】

写真⑦:調査区①-5 川S1出土人形代

写真⑧: (左)調査区①-3 溝S2出土舟形代 (37cm)

(右)調査区②-3.4 溝S2出土舟形代 (23cm)

【管玉】

写真⑨ (左)調査区②-7.8 溝S36出土

(中)調査区②-7.8 溝S8出土

(右)調査区①-2 川S1出土

■灌漑用の川と溝

調査地の南東側でみつかった川S1(調査区①-2～6)は、古墳時代の後期から平安時代にかけて、長い間流れていたことが分かりました。特に調査区①-5では、大量の土器が出土しており、その中には墨書土器が多く含まれます。その内容は判読できないものもありますが、「田」「田屋」など水田耕作にかかわる文字が目立ちます。その他にも人形代が複数点みついています。残りの良いものは、墨で烏帽子や眉、目、鼻、口、髭を表現していました。また、川から分水していたと考えられる溝が複数条がみつっており、その中からは舟形代がみついています。



写真⑨

調査成果のまとめ

今回の調査では、次のような既往の調査では具体的にはわからなかった卑弥呼の時代(弥生時代末から古墳時代初め)の景観を明らかにできたことが大きな成果と言えます。

① 6基の周溝墓からなる墓域が形成されていた。その墓域内の周溝墓には、地域の首長の墓と考えられる前方後方形周溝墓が2基含まれており、それが南北に並んで見つかった。

② 特殊な構造の掘立柱建物が墓域の西側に隣接して建てられており、祭祀空間を形成していた。

③ 調査区南東一帯でみつかった灌漑排水路の存在から、生産域(水田)が調査地の北側に広がっていた。

今後の調査で、今回の調査で明らかになった生産域・墓域・祭祀空間に加えて、居住域が明らかにすることができれば、当該時期の野洲川左岸下流域の具体的な景観がより鮮明に浮かび上がってくるに違いありません。